令 和 6 年 度　自 己 評 価 計 画 書

石川県立金沢辰巳丘高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考
1 ＩＣＴ機器の効果的な活用により、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、学習意欲の向上や学習習慣の定着を図るとともに、課題を発見し解決できる力を育むことを通して、個々の進路実現を目指す。	① 全ての教員が研究授業・公開授業を行い、授業参観や校内外での研修、教員間の研究会を設定し、ＩＣＴ機器及びアプリケーションを効果的に活用する授業スキルの研鑽を継続する。	教務課 情報課 各教科	全教員がＩＣＴ機器を効果的に活用した授業改善を積極的に行っているが、授業に生徒用端末を効果的に組み込めていない場面もみられる。ICT機器の操作スキルの向上、環境整備、授業での効果的な使い方についての研究の継続を行うことで、授業実践力を上げていく。	【努力指標】 年間を通して、ＩＣＴ機器およびアプリケーションを効果的に活用した授業実践を継続的に行っている。	ＩＣＴ機器を効果的に組み込んだ授業を実践していると答える教員の割合が A　９０％以上である B　８０％以上である C　７０％以上である D　７０％未満である	C評価以下の場合は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。（教員によるアンケート）
	② 指導と評価の一体化と学習計画に沿った指導と評価を実施することによる、生徒の実態に合わせた改善を学校あげての継続的な取組とし、各教科で定着させていく。	教務課 各教科	個に応じた指導を実践していくうえで、本校の多様な生徒たちに有効であると考えられることからも、従来の取組を継続していく。今後は、教員が評価疲れにならないためにも、各評価のタイミングや内容の見直しをする機会を設定していく。	【努力指標】 各教科で指導と評価の一体化を実現するために、授業評価を参考に授業の改善・充実をはかる一連のサイクルを確立する。	指導と評価の一体化の趣旨を理解し、授業、学習評価、学習評価に基づく授業改善の一連のサイクルを実践していると答える教員の割合が A　８０％以上である B　７０％以上である C　６０％以上である D　６０％未満である	C評価以下の場合は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。（教員によるアンケート）
	③ 生徒が授業以外で学ぶ習慣を身につけるために、ＩＣＴ機器を活用して学校外で学習する予習・復習のための課題の提示や、定期テスト等と結びつけた計画的な学習指導を行う。また、引き続き学ぶことの楽しさを体感するような授業の実践とＩＣＴ機器の機能を活かした課題等で学習に取り組みやすい環境を整備する。	教務課 各学年 各教科	学習時間が１時間以上の生徒の割合が、前年度よりは微増したものの、48.6%と少なく、定期試験直前を除き継続して学習に取り組む習慣が定着していない。コース間の差が顕著にみられるため、コースや個人の目標設定と現状把握をしたうえでの学習習慣に対する指導を行うとともに、各教科は、課題の内容の質・量のバランスを相互に検討していく必要がある。	【成果指標】 各教科でＩＣＴ機器を活用して計画的に課題を設定し、その提出や評価を適切に行う。放課後学習や自己実現のための学習を含めた授業以外の学習時間の確保をはかる。	平日の学習時間（授業以外）が１時間以上であると答える生徒の割合が A　８０％以上である B　７０％以上である C　６０％以上である D　６０％未満である	C評価以下の場合は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。（生徒によるアンケート）
	④ 継続的な個人面談と計画的なキャリア教育の実践により、個々の生徒が目標を明確化させ、有意義な高校生活を送ることができるよう支援を行う。進路関係の行事においては、生徒が主体的に参加できる形式の割合を増加させる。また、学校行事や部活動で得た達成感が将来の目標設定につながるよう工夫する。	進路指導課 各学年	保護者対象進路説明会等、進路情報を学校から発信する機会への告知方法を工夫することにより、関係行事への保護者の参加数が増加、本校の指導状況を理解していただく機会を拡充することができた。 　また、自分の関心事と学問領域をつなげ、進路調べが行えるオンラインサービスを全学年希望者に導入するなど環境が整備されてきたこともあり、より個に応じた進路指導を推進していきたい。	【満足度指標】 生徒が主体的に学べるように、本校でのキャリア教育が計画的かつ効果的に機能し、生徒の進路目標が明確化している。	本校でのキャリア教育が、生徒の主体的な活動を通して意義あるものとなっていると答える生徒の割合が A　９０％以上である B　８０％以上である C　７０％以上である D　７０％未満である	C評価以下の場合は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。（生徒によるアンケート）
2 挨拶や時間管理、服装容儀などの指導を通して、基本的な生活習慣を身につけ自律性を高める。また、外部の方との対話を通して、協調性やコミュニケーション力を育む。	① 生徒の遅刻状況に関する情報を全教職員で共有し、個人及び学級・学年ごとの集団等にそれぞれ対応した指導を行い、時間や期限を守ることの大切さを自覚させる。また、保護者との連携を密にし、遅刻の減少を目指すことで規範意識の涵養をはかる。	生徒課 各学年	自家用車での送迎の増加による渋滞と遅刻の深刻化に対応、生徒・保護者に対して、文書による可能な範囲内での通学方法の見直しの呼びかけや予備入学での新入生保護者への働きかけを行う等、遅刻数の減少に取り組んでいる。保護者との協力体制が構築されてはきているが、遅刻常習者は依然として存在するため、引き続き指導を行っていく。	【成果指標】 年間を通じて遅刻５回以上の生徒の割合が、令和５年度の14.9%を下回るようにする。	年間を通して遅刻５回以上の生徒の割合が A　１０％未満である B　１５％未満である C　２０％未満である D　２０％以上である	C評価以下の場合は、結果を分析して改善策を検討する。	年度末に調査する。
	② 協調性やコミュニケーション力を育むために、探究活動等による取組を通して、地域や外部の方々と積極的に関わる機会をさらに増加させる。また、芸術コースの生徒が地域の行事に積極的に参加することで、本校の活動や取組を発信していく。	教務課 各学年	「総合的な探究の時間」は活発に行われているが、諸課題の解決・改善策を検討・考察するための深化が必要であると考えられる。こうした経験を通して、生徒の自己有用感や自己肯定感を高め、さらに豊かな人間性と社会性を育むことができるよう取り組んでいきたい。	【成果指標】 地域や自分たちに関わる諸課題の解決・改善策を検討・考察することで、自己有用感や自己肯定感を高めていくため、探究活動の拡充をはかっていく。	「総合的な探究の時間」における活動において、協調性やコミュニケーション力が身についたと答える生徒の割合が A　８０％以上である B　７０％以上である C　６０％以上である D　６０％未満である	C評価以下の場合は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。（生徒によるアンケート）

重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考
3 校種間交流や地域と連携した探究活動を積極的に行い、地域や自分たちに関わる諸課題の解決・改善策を検討・考察する経験を通して自己有用感や自己肯定感を高める。さらに、豊かな人間性と社会性を育むことによって、保護者・地域から信頼される学校づくりをより一層推進する。	① 地域及び近隣の小・中学校、大学等との交流活動を通して本校の教育活動への理解と協力を促進する。また、その情報を各種の広報活動を通して発信していく。	総務課 各コース	様々な活動に対して事後の広報には取り組めているが、事前案内に関してはまだまだ不十分である。直前になってその行事について知ったという保護者からの意見もあることから、メール配信等による案内の徹底をはかっていきたい。	【満足度指標】 各コースの特色を活かした地域や小・中学校、大学等との交流活動等について、その取組や内容が保護者等にしっかりと伝わり、活動に対しての理解や協力を得ることができる。	各種の交流活動等について、広報活動を通して学校の取り組みがよくわかると答える保護者の割合が A　９０％以上である B　８０％以上である C　７０％以上である D　７０％未満である	C評価以下の場合は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。（保護者によるアンケート）
	② 地域や近隣の小・中学校、大学等との交流事業、学校行事等、本校の特色ある教育活動の様子を、積極的かつ即時性をもってホームページに掲載、発信していく。	総務課 各コース	学校行事・学校内の様子に関してその都度、担当部署が発信を速やかに行う習慣が定着してきている一方、部活動においては活動が低調気味であるものもあり、発信する内容に苦慮している部分もあると思われる。部活動の活性化について、議論を重ね、対応を考えていきたい。	【努力指標】 行事が終了するごとに情報の更新を速やかに行う。部活動に関しては各学期ごとに最低１回は更新する。	担当する部署（課・学年等）や部活動におけるホームページの更新回数が、年３回以上であると答える教員が A　８５％以上である B　７５％以上である C　６５％以上である D　６５％未満である	C評価以下の場合は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。（教員によるアンケート）
	③ 生徒自らが地域や保護者の方々とともに行う行事を企画し、主体性や社会性を身につけ、一人ひとりが充実感・達成感を得ることができるような生徒支援を行っていく。	生徒課 各学年	生徒会が中心となり、生徒主体で辰巳祭等の学校行事を行っていく土壌が形成されてきているが、その一方で学校行事以外の日々の活動において、積極的に参加している生徒はそれほど多くない。今後は多くの生徒が学校生活の中で充実感を得ることができるように工夫していきたい。	【満足度指標】 生徒が生徒会行事に主体的に関わり、より積極的に参加し、充実感・達成感を得ることができる。	学校行事や生徒会活動に積極的に参加していると答える生徒の割合が A　９０％以上である B　８０％以上である C　７０％以上である D　７０％未満である	C評価以下の場合は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。（生徒によるアンケート）
4 教育活動の効果をより一層高めるため、学校や教員が担う業務の整理、ＩＣＴ機器活用による業務の効率化や業務分担の適正化等に積極的に取り組む。	① 働き方を再考・工夫し、すべての職員が、生徒一人ひとりに丁寧に関わりながらも、学習指導・生徒指導などの業務に専念できる環境づくりをさらに進めていく。	管理職 各課・室 各学年	管理職の声かけや業務の整理、アドバイス等に高い評価値となっていたが、夏期休業以降の補習や個別指導、学校行事の準備等による繁忙期の業務集中によって年度後半にはやや数値が下がる結果となっている。今後は行事の精選や業務の平準化などによって「教員の働き方改革」や「ワークライフバランス」の実現に向けてさらなる取組を推進したい。	【満足度指標】 全職員が計画的な業務の遂行を意識し、教材等の共有をはかるほか、役割分担の見直しによる業務の平準化を行い、組織的な学校運営を行うことで、時間外勤務時間を減らす。	業務の平準化や部署間の連携により、働き方を改善する努力がなされていると答える教員が A　８０％以上である B　７０％以上である C　６０％以上である D　６０％未満である	C評価以下の場合は、結果を分析して改善策を検討する。	7月、1月に調査する。（教員によるアンケート）